

## 第 15 章 言語の起源と進化 (池内正幸)

### <基本問題>

1. 言語併合の前駆体とは何か。

(解答例) 道具作製などに用いられた組み合わせ操作としての一般併合(と語彙要素)である(243 ページ)。

2. 言語の起源はいつだと考えられるか。

(解答例) 言語併合普遍性仮説(245 ページ)のもとで、最近の古人類学、考古学、遺伝学の成果に拠って考えると、およそ 30 万年(以上)前である(246 ページ)。

### <発展問題>

1. ヒトのことばは、「ここに依存して」(mind-dependent)いる。一方、動物のことばは、「ここから独立している」(mind-independent)とされている。それぞれ、例を挙げて説明せよ。

(解答例) 動物のことばの場合、それはほぼ必ず外界に物理的対応物が存在する。心的イメージ/表示には拠らない。つまり、ここから独立している。動物のことばとしての警戒声では、たいていの場合、見張り役/仲間から実際に捕食者が見える。ベルベットモンキー(vervet monkey)では、ワシ、ヘビ、レパードが見えた時に警戒声が発せられるのが原則である。ところが、典型的/基本的に、ヒトのことばの場合はその発話に外界の物理的対応物が必要ということはない。それはまず抽象的概念を指す「平和」とか「民主主義」などの語を考えるとすぐにわかるし、仮定法も然りである。また、実は、物を指しているように思われる固有名詞でさえ外界の対応物があるわけではないのである。たとえば、「富士山」という語を考えてみよう。この語は、静岡県と山梨県にまたがる日本一高い山という意味であるが、誰も、その頂上から裾野までの全体を具体的/物理的空間的に承知して使っているわけではない。この「富士山」という語は、物理的具象物としての現実にそびえている山を指すのではなく(というより、それはむしろ不可能で)、私たちの頭の中にいわば心的イメージあるいは内的表示としての“富士山”というものがあり、それを指しているのである。つまり、ここに依存している。だから、「富士山」の意味は、人それぞれで多少違うであろう。たとえば、静岡県民の「富士山」と、山梨県人の「富士山」はだいぶ違うはずである。しかし、おおよそのところではその心的イメージが重なっているので実生活上は何の問題もな

いということである。また、もちろん、富士山が見えなくても、「富士山はいいよねえ」などと発することができる。池内(2010)、Berwick & Chomsky (2016)を参照。

## 2. キャンベルモンキーの発出する音声連鎖について述べよ。

**(解答例)** キャンベルモンキー (Campbell's monkey) は、コートジボワール、ガーナなどに生息している霊長目オナガザル科で、オランウータン、チンパンジーなどより遠い親戚である。キャンベルモンキーの警戒声の基本声タイプは、次の6種類である: boom, krak, hok, krak-oo, hok-oo, wak-oo。boom は、それが使われるときには必ず最初に来る。krak は捕食者がレパードの時、hok は冠ワシの時というように捕食者に特定のである。-oo は接尾辞で、捕食者が特定のでない場面で用いられる。この部分では意味的に合成的である。これら6種の基本声を結合して、9種類の異なる警戒声音列を作る。たとえば、2回の boom+約12回の krak-oo からなる音列(i)に、1~7回の hok-oo を散りばめて発すると、縄張り防御の警戒声となる。

(i) boom+boom+krak-oo+krak-oo+krak-oo … krak-oo …

### <参考文献>

Ouattara, Karim et al. (2009) "Campbell's Monkeys Concatenate Vocalizations into Context-specific Call Sequences," *Proceedings of the National Academy of Sciences* 106, 22026-22031.